
君に溺れる

泉水里弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に溺れる

【Nコード】

N1647Q

【作者名】

泉水里弥

【あらすじ】

片思いのボクのお話。

彼女の靴音しか知らなかったボクに星が勇気をくれた。

彼女の後姿を、その背丈を、髪の高さを教えてくれた。

靴音

あ。

まただ。彼女がいる。

後ろに彼女の気配を感じる。

でも、臆病で消極的なところくらいしか特徴のないボクは振り向くことも出来ない。

どうしてだろう。

顔もまだ見たことのない、ましてや話したことすらない、ただ気配だけの存在の彼女にいつしかボクは恋をしていた。

学校で、街中で、どこでも聞くことの出来るローファアの控えめな音。

靴底を引きずったりしないので、コツコツと響く定期的なその音。ボクよりも歩くのが少し遅くて、ボクが5歩歩くと一緒になる。

そしてまた1歩ずつずれていって、5歩歩くと重なる。

そんな一瞬がなんだかうれしくて、ボクは5歩歩くごとにひとりのにやけてしまう。

たまに彼女に合わせてゆっくり歩いてみたりもする。

そのたびにやつくボクは周りからどう思われているだろう。

でもそんなことは関係ない。うれしいのだから仕方がない。

歩幅も違う。彼女は背が低いのだろうか。ボクは彼女の背丈すら知らない。

だからわからないけれど、ボクがボクのペースで歩いてしまうと、彼女のその控えめでゆっくりなローファアの音は遠く小さくなる。

そのたびボクは人知れず彼女との距離を一定に保つように、少しずつ歩幅を狭めて、ぎこちない歩き方になる。

そんなバカみたいなボクのことを、彼女は知らない。

彼女がボクの後姿を覚えていてくれたらうれしいのに。

そして、そんな時間はそう長くはない。

当たり前だ、ボクの家と彼女の家は同じではない。そう近くもないと思う。

分かれ道が現れるのは、住宅街のいくつもある曲がり角の中の7つめ。

彼女はそこを左へ曲がる。

だんだん左耳へと移り変わる靴音。

そしてゆっくりと消えていく。

彼女が曲がり角を曲がった後、ようやくボクは後ろを振り向いて、彼女の消えていったと思われる曲がり角を見つめ、それから空を見上げる。

そして小さく祈る。

さよなら。また明日会えますように。

空を見上げて星はまだ見えない。

祈りは星には届かない。

今日もボクは彼女の後姿を見る勇氣もない。

次の日、ボクは帰りが少し遅くなってしまった。

なぜか。そんなことは関係ない。

この日の帰り道はつまらないものになりそうだ。

だって、今日は彼女に会えないのだから。

いつも同じ時間に同じように帰り道を共にしていたのだ。

今日に限って彼女も帰りが遅いなんてことはあるはずがない。

下を向いて足早に家路に着く。

いつも通る道が違って見えていやだった。

楽しかった帰り道。いつもならすぐにやってくる7つめの曲がり角。

曲がり角を数えるのも、今日はやめだ。

それでも無意識に数えているボクがいた。

これで6つめの曲がり角。

なにを急いでいるのかというくらい早足のボク。

でも、そんなボクの耳に聞きなれた靴音が響いた。

いつもとは違った聞こえ方だが、確かに彼女だ。

試しにボクはいつもの早さで歩いてみた。

1歩目は彼女に合わせる。

そして自分のペースで歩いて、5歩目。

コッソ。

ボクの踏み出した靴音と重なるその控えめな音。

彼女だ。間違いない。

下を向いた顔がにやけた。

だが同時に、なぜ下を向いているのかと自分を責めた。

前を見ていれば彼女の後姿が見れたのに。

そう、彼女はボクの前を歩いている。

早足で歩いていたボクは、いつものゆっくりな彼女に追いついたのである。

前を向け、前を向け。

たったそれだけの勇気がない。

ボクは、臆病で消極的なところくらいしか特徴がないのだ。

今日もボクは彼女の後姿を見る勇気もないのか。

早くしろ、早くしろ。早くしなければ7つめの曲がり角が来てしまう。

あと10歩、9歩…。

あと1歩。

コッソ、と彼女と靴音が重なる。

星

ダメだ。今日も勇気は出ない。

彼女の靴音が左耳に響く。

ああ、さよならをしなくては。

ボクはその音を聞きながら空を見上げた。

明日こそは、と星に祈ろうと思った。

まだ見えない星に。

だけど、見上げた空には、星がひとつ。

「一番、星…？」

小さくボクは呟いた。

同時に響いていたかすかな靴音が消えた。

いや、止まった？

反射的にボクは彼女の曲がった方向、つまり左を向いた。

それは星がくれた勇気かもしれない。

そこには、空を見上げている彼女がいた。

こうしてボクは、はじめて彼女の姿を見た。

彼女は空を見ていて、ボクの視線に気付かない。

背中まで伸びた彼女の黒髪が風に吹かれて揺れた。

風に吹かれた髪をなでる彼女の右手。

残念ながら顔は見えない。

でもそれだけで十分だった。

ボクは瞬きも忘れて彼女を見ていた。

チェック柄のマフラー。

サラサラとなびくストレートの髪。

身長は思っていたほど低くはない。

片方だけ肩から落ちているかばんの持ち手。

少し短いスカート。

制服は、ボクの学校のものだ。

そのときだけ時間が止まっているような気がした。

とても長い時間に感じた。

ボクはどれくらいの時間彼女を見ていて、彼女はどれくらいの時間空を見上げていたのだろうか。

強くて冷たい風が吹いて、ボクたちの時間は動き出した。

彼女の髪が乱れて、彼女は空から目を離し、また髪をなでつけた。

そして片方だけ落ちたかばんの持ち手を直そうと横を向く。

彼女の顔が、横顔が、見えるか見えないか。

ボクは走り出す。

彼女はボク存在に気付いたのだろうか？

わからない。

気付いていて欲しい。

いや、気付いていなくていい。

ボクだけが知っていればいい。

走りながらそんなことを考えていた。

明日、学校に行くことに緊張を覚えながら。

家に帰っても彼女のことしか考えられなかった。

顔は見なかったからわからない。

見る勇気がなかったからわからない。

もし、明日学校で彼女の靴音を聞いたら、あのサラサラとした髪を見たら。

ボクは彼女に気付くだろうか。

彼女はボクに気付くだろうか。

眠る想い

眠りにつくと、彼女の後姿。

そして顔が見えるか見えないか、そこでボクは目を覚ます。

そんな繰り返しで朝をむかえる。

でも不思議と眠くはない。

むしろ頭は最高に冴えていた。

ボクはゆつくりと朝ごはんを食べて、学校へと向かった。

ゆつくりしていたのに、学校に着いたのはいつもより30分も早かった。

することがない。

友達もまだ来ていないし、授業の予習をするような真面目さはなかった。

まだ生徒はまばらだ。

こんな時間に学校にいるのは部活動をしている人が大半だろう。

帰宅部でいつもぎりぎりの時間に登校しているような人はこんな時間にはいない。

ボクは仕方なく、寒い廊下の窓から見えるテニス部の朝練習をぼーっと眺めていた。

でも、頭の片隅では彼女のことを考えていた。

彼女はいつもボクと同じくらしいの時間に下校する。

つまりボクと同じ帰宅部である可能性が高い、だとか。

時間に几帳面なのかそうでないのか、だとか。

顔を見ていないから、学年もはっきりしない。

ボクと同じ学年だったら、何組だろう。

名前も知らないから、テストの結果だとかクラス替えのときもわからないな、だとか。

とにかくくだらないことを延々と真面目に考えていた。

好きな食べ物はなんだろう。

休日は何にをしているのかな。

知りたいことは山ほど見つかった。

でもボクは彼女の後姿しか知らない。

彼女はボクのことを、知らない。

だんだん校舎内に人が増えてきた。

廊下がにぎわってくる。

そんな中ボクは、とてもむなしくて孤独な気分になった。

これから知りたいことを知っていく機会はあるだろう。

そんな前向きな考えはすぐに却下される。

ボクにそんな勇氣はないんです。

彼女の顔すら見れなかったボクが、彼女と言葉を交わす日が来るとは到底思えない。

友達が登校してきて、ボクのところに来了。

クラスが違うから廊下でしか会えない。そんな人は大勢いるので廊下にはどんどん人が増える。

ボクは人に溺れながら、それでも彼女のことを考えていた。

遠くに彼女と同じようなサラサラの黒髪を見つけて、それをただ眺めていた。

今思えば、それは彼女だったのかも知れないし、彼女じゃなかったのかもしれない。

それはボクにはわからない。

でも確かにこのときボクは彼女のことが好きでした。

雪が溶けて、桜が散っても、ボクと彼女はただ同じ時間に下校している同じ学校の生徒。

ただそれだけの関係でしかなかった。いや、関係なんてなにもなかった。

そのまま学校を卒業して、それからはあの道を通ることもなくなっ

てしまった。

彼女の曲がっていた道はどこだったかだとか、どこで空を見上げたかだとかも忘れていった。

でも1番星を見ると、不思議と彼女のことを思い出す。

彼女の靴音、サラサラの髪、それをなでる小さな手。

あのとき彼女はなにを思っ
て空を見上げていたんだろう。

それを知る術はもうないけれど、ボクはそれを考えずにはいられない。

見えない星に今も願う。

またいつか会えたなら、勇気を出して言えますように。

ずっと、好きでした。

さよならさよなら、ボクの好きな人。

眠る想い（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございました。

このお話は、朝の廊下、溺れる、星から連想して書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1647q/>

君に溺れる

2011年1月19日01時10分発行